

# 強調の方法について

私立文系初級ユーザー

2013年12月9日

**はじめに** LaTeX では、文章の一部を強調したいというときには、とりあえずそこを `\emph{}` で囲んでおけばよくて、もしもその表記について変更したい場合には、後から `\emph` を再定義したり、既存のマクロに `\let` したりすればいいですね。

本文書では、和欧文の強調表記のバリエーションについて、概観をしてみようと思います（本文フォントがセリフ体や明朝体の場合に限定します）。念頭に置いているのは、欧文原文に沢山の強調箇所が含まれている文章を邦訳する場合のような、文中に強調表記が頻出するケースです（以下で例文に使っているのは、web で見つけてきた新渡戸稲造『武士道』の一節です<sup>(1)</sup>。英語原文・邦訳ともに、原著にはそれぞれ語句が強調されている部分が元々含まれていますが、ここでの強調箇所は、私が勝手に付したものです）。

**デフォルト** まず、pLaTeX の `\emph` の設定は “`\gtfamily\itshape`” となっているので、デフォルトだと、欧文の強調部分は現在のファミリのイタリックになり、和文の強調部分はファミリがゴシック体になりますよね<sup>(2)(3)</sup>：

## ■ ローマン体+イタリック

If there is anything to do, there is certainly a *best way* to do it, and the *best way* is both the most *economical* and the most *graceful*. Mr. Spencer defines *grace* as the most *economical* manner of motion. The tea ceremony presents certain definite *ways* of manipulating a bowl, a spoon, a napkin, etc. To a novice it looks tedious. But one soon discovers that the *way* prescribed is, after all, the most saving of *time* and *labor*; in other words, the most *economical* use of force, – hence, according to Spencer’s dictum, the most *graceful*.

## ■ 明朝体+ゴシック体（太字）

茲に一事あり、之を爲すに、必ずや**最良の方法**なるものなくんばあらず、而して、其の**最良の方法**は、最も**經濟**に合して、又た最も**優美**なるものならざるべからず。スペンサー氏は**優美**の定義を下して、動作の最も**經濟的**なる方法と云ふ。茶道の法とは茶碗、茶匙、帛紗等を用ふるの**定式**なり。其法たる初心の輩には、或は倦厭を來すべしと雖、少しく斯道に入らば、直ちに此れぞ**時間**と**努力**との最も節約を得たるものなることを知らん。換言せば、此**定式**は即ち力の利用の最も**經濟的**なるものにして、スペンサーの定理に従へば、最も**優美**なるものなり。

欧文については、強調箇所がイタリックになるというのは、出版物の場合でも一般的ですし、強調語が沢山含まれていても紙面の色味 (“greyness” というのでしょうか) が均一なママなので、とても読みやすいと思います。

(1) 英語原文は Project Gutenberg にあった Inazo Nitobe, *Bushido, the Soul of Japan*, 13th ed. 1908 からで、邦訳は Google ブックスで見つかった新渡戸稲造 (櫻井鷗村訳) 『武士道』(丁未出版社・明治 41 年) より。後出の独語訳も Google ブックスでヒットした Inazo Nitobe (übers. v. Antje Tussinger), *Bushido: der Weg des Kriegers*, RaBaKa Publishing 2009 に拠ります。

(2) “`\gtfamily\itshape`” なのですから、素朴に考えると、和文は `gt/m/it` (ゴシックのイタリックないし斜体) になるべきのようにも思えますが、アスキーのデフォルトの `fd` では `gt/m/it` は未定義なので、`\DeclareKanjiSubstitution` の設定によって、`gt/m/it` は `gt/m/n` に代替されます (“Font Warning” が出ます)。  
`jsclasses` の場合には、`gt/m/it` は `\DeclareFontShape` で明示的に `gt/m/n` に `ssub` されているので、やはり `gt/m/it` は `gt/m/n` となります (log に “Font Info” が出力されます)。

(3) 和文が `mc/m/n` と `gt/m/n` の 2 書体構成の場合に、これらは NFSS 上は `mc` も `gt` もウエイトが “m” であるにも拘わらず、実際にマッピングしてる実フォント (「MS 明朝 + MS ゴシック」「IPA 明朝 + IPA ゴシック」「ヒラギノ明朝 W3 + ヒラギノ角ゴ W6」) は「明朝体 “細字” + ゴシック体 “太字”」の組み合わせとなっています。つまり、明朝体とゴシック体とでウエイトが同じではないので、ゴシック体のほうが太く見えると思います。

他方、和文のほうはと言いますと、強調箇所がゴシック体の太字になっており、これも実際の出版物でもよく見掛ける体裁ではあるのですが、強調された部分がちょっと黒過ぎるような気もしないではありません。

章や節の見出しですとか、ごく少数の特別に目立たせたい語句等であれば、ゴシック体太字でもいいと思うのですが、夥しい数の強調語句が含まれている文章の場合に、強調箇所をみなゴシック体太字にしてしまいますと、紙面の色味が均一でなくなってしまうように思います。

なお、`\emph` の引数に和文と英数字が混在する場合には、例えば “`\emph{Maji で Koi する 5 秒前}`” が “**Maji で Koi する 5 秒前**” となってしまいますね…。

次に、何らそういう必要性は感じないのですが、欧文と和文とで、強調の表記を揃えてみたいと考えたとします。

まず、欧文も和文も強調箇所を斜体にしてみましょう：

■ スラント ■ ローマン体+スラント

If there is anything to do, there is certainly a *best way* to do it, and the *best way* is both the most *economical* and the most *graceful*. Mr. Spencer defines *grace* as the most *economical* manner of motion. The tea ceremony presents certain definite ways of manipulating a bowl, a spoon, a napkin, etc. To a novice it looks tedious. But one soon discovers that the way prescribed is, after all, the most saving of *time and labor*; in other words, the most *economical* use of force, – hence, according to Spencer’s dictum, the most *graceful*.

■ 明朝体+斜体

茲に一事あり、之を爲すに、必ずや最良の方法なるものなくんばあらず、而して、其の最良の方法は、最も經濟に合して、又た最も優美なるものならざるべからず。スペンサー氏は優美の定義を下して、動作の最も經濟的なる方法と云ふ。茶道の法とは茶碗、茶匙、帛紗等を用ふるの定式なり。其法たる初心の輩には、或は倦厭を來すべしと雖、少しく斯道に入らば、直ちに此れぞ時間と勞力との最も節約を得たるものなることを知らん。換言せば、此定式は即ち力の利用の最も經濟的なるものにして、スペンサーの定理に従へば、最も優美なるものなり。

欧文フォントのスラントも、和文フォントの斜体も、実際の出版物でも目にするがありますし、ワープロで作られた文書なんかだと割とよく使われてたりしますよね。ここでは graphicx パッケージを利用して機械的に斜めにしているので、そもそもあまりキレイでないということを措くとしても、強調箇所が一目では分かりにくいように思われます。

今度は、和文の強調部分がゴシック体なのに合わせて、欧文の強調箇所をサンセリフにしてみます(セリフ+サンセリフ、明朝+ゴシックどちらの組み合わせについても、ウェイトも揃えてみました)：

■ サンセリフ ■ セリフ+サンセリフ

If there is anything to do, there is certainly a **best way** to do it, and the **best way** is both the most **economical** and the most **graceful**. Mr. Spencer defines **grace** as the most **economical** manner of motion. The tea ceremony presents certain definite ways of manipulating a bowl, a spoon, a napkin, etc. To a novice it looks tedious. But one soon discovers that the way prescribed is, after all, the most saving of **time and labor**; in other words, the most **economical** use of force, – hence, according to Spencer’s dictum, the most **graceful**.

■ 明朝体+ゴシック体 (細字)

茲に一事あり、之を爲すに、必ずや最良の方法なるものなくんばあらず、而して、其の最良の方法は、最も經濟に合して、又た最も優美なるものならざるべからず。スペンサー氏は優美の定義を下して、動作の最も經濟的なる方法と云ふ。茶道の法とは茶碗、茶匙、帛紗等を用ふるの定式なり。其法たる初心の輩には、或は倦厭を來すべしと雖、少しく斯道に入らば、直ちに此れぞ時間と勞力との最も節約を得たるものなることを知らん。換言せば、此定式は即ち力の利用の最も經濟的なるものにして、スペンサーの定理に従へば、最も優美なるものなり。

紙面の濃淡が変わらないという点では悪くなくて、とても上品な印象ではあるのですが、これだとやはりどこが強調されているのかが、パッと見では分かりづらいですね。

欧文と和文の双方に適用可能な語句の強調方法としては、他には、下線を引くとか同一ファミリの太字にするというやり方も考えられます(あと、文字色を変えたり 背景色 を変えるという手もありますが、ディスプレイ上で閲覧するだけならまだしも、単色で印刷する場合も考慮すると出来れば避けたいので、ここでは割愛します)。

というわけで、下線を引いてみます：

アンダーライン ■ アンダーライン

If there is anything to do, there is certainly a best way to do it, and the best way is both the most economical and the most graceful. Mr. Spencer defines grace as the most economical manner of motion. The tea ceremony presents certain definite ways of manipulating a bowl, a spoon, a napkin, etc. To a novice it looks tedious. But one soon discovers that the way prescribed is, after all, the most saving of time and labor; in other words, the most economical use of force, – hence, according to Spencer’s dictum, the most graceful.

■ 下線

茲に一事あり、之を爲すに、必ずや最良の方法なるものなくんばならず、而して、其の最良の方法は、最も經濟に合して、又た最も優美なるものならざるべからず。スペンサー氏は優美の定義を下して、動作の最も經濟的なる方法と云ふ。茶道の法とは茶碗、茶匙、帛紗等を用ふるの定式なり。其法たる初心の輩には、或は倦厭を來すべしと雖、少しく斯道に入らば、直ちに此れぞ時間と努力との最も節約を得たるものなることを知らん。換言せば、此定式は即ち力の利用の最も經濟的なるものにして、スペンサーの定理に従へば、最も優美なるものなり。

なにかと批判されることの多い下線ですが、少なくとも強調箇所が一目で識別出来るという利点があるのも確かなので、特定の分野においては根強い需要があるのでしょうか（なんて言いながらも、学部生の頃、あるドイツ語の学術書の邦訳で、原著だとイタリックだった部分が訳書では一冊丸々全頁にわたって下線が引かれているのを見たときには「他にやりようはなかったの?!」と当惑しましたが）。

次は“\let\emph\textbf”として、同一ファミリの太字にしてみましょうか：

ボールド ■ ローマン体+ボールド

If there is anything to do, there is certainly a **best way** to do it, and the **best way** is both the most **economical** and the most **graceful**. Mr. Spencer defines **grace** as the most **economical** manner of motion. The tea ceremony presents certain definite **ways** of manipulating a bowl, a spoon, a napkin, etc. To a novice it looks tedious. But one soon discovers that the **way** prescribed is, after all, the most saving of **time and labor**; in other words, the most **economical** use of force, – hence, according to Spencer’s dictum, the most **graceful**.

■ 明朝体+太字

茲に一事あり、之を爲すに、必ずや最良の方法なるものなくんばならず、而して、其の最良の方法は、最も經濟に合して、又た最も優美なるものならざるべからず。スペンサー氏は優美の定義を下して、動作の最も經濟的なる方法と云ふ。茶道の法とは茶碗、茶匙、帛紗等を用ふるの定式なり。其法たる初心の輩には、或は倦厭を來すべしと雖、少しく斯道に入らば、直ちに此れぞ時間と努力との最も節約を得たるものなることを知らん。換言せば、此定式は即ち力の利用の最も經濟的なるものにして、スペンサーの定理に従へば、最も優美なるものなり。

欧文のほうは、どうしても強調部分が黒く見えてしまいますね。もちろんボールド自身には罪はないのですけれど、冒頭の「デフォルト」の節で和文のゴシック体太字について感じたことが、欧文ボールドについても当てはまるように思います。つまり、ボールドを表題や見出し等で単独で使ったり、または語学の参考書みたいにごく一部の強調語に使うのであれば効果的なのですが、通常の文章のあちらこちらにボールドを散りばめると、紙面の色味が一定でなくなってしまいます。

翻って和文について見てみますと、明朝体太字自体はせっかくキレイなデザインであるにも拘わらず、明朝体細字の本文に太字を混ぜてしまうと、縦のストロークと横のストロークのコントラストのせいかな、なんだか細字を水平方向にスライドさせた文字であるかのように見えてしまいます。本文がゴシック体の場合に強調をゴシック体太字にするのならばまた印象が異なるのだと思うのですが、本文が明朝体の文章に明朝体太字を混ぜるのは、あまり読みやすくはない気がします。

さて、和文と欧文とで強調の表記を揃えなければならない要請は本来ないので、以下では、和文特有の強調法と欧文特有の強調法について、簡単に眺めてみることにします。

和文に特有の方法

上で見てきた強調法は、欧文・和文どちらにも適用可能なものでしたが、和文特有の語句の強調方法としては、傍点や圏点を振るというやり方を挙げる事が出来ると思います<sup>(4)</sup>。

<sup>(4)</sup> 私は久しく「ヽ」が傍点で、「●」や「○」が圏点だと思い込んでいたのですが、チラッと検索してみた限りでは、どうもそういうわけでもないみたいです。強いて使い分けるとすると、縦組みの文字の横に振るのが傍点で、横組みの文字の上に振るのが圏点ということになるのでしょうか？

plexit パッケージから \bou マクロを拝借して、まず、いわゆる「黒ゴマ “◡”」と「白ゴマ “◢”」を付するとこんな感じですよ（白ゴマは、ゴマというよりも、なんか柿の種みたいに見えますけど）：

黒ゴマ・白ゴマ ■ 黒ゴマ

茲に一事あり、之を爲すに、必ずや最良の方法なるものなくんばならず、而して、其の最良の方法は、最も經濟に合して、又た最も優美なるものならざるべからず。スペンサー氏は優美の定義を下して、動作の最も經濟的なる方法と云ふ。茶道の法とは茶碗、茶匙、帛紗等を用ふるの定式なり。其法たる初心の輩には、或は倦厭を來すべしと雖、少しく斯道に入らば、直ちに此れぞ時間と勞力との最も節約を得たるものなることを知らん。換言せば、此定式は即ち力の利用の最も經濟的なるものにして、スペンサーの定理に従へば、最も優美なるものなり。

■ 白ゴマ

茲に一事あり、之を爲すに、必ずや最良の方法なるものなくんばならず、而して、其の最良の方法は、最も經濟に合して、又た最も優美なるものならざるべからず。スペンサー氏は優美の定義を下して、動作の最も經濟的なる方法と云ふ。茶道の法とは茶碗、茶匙、帛紗等を用ふるの定式なり。其法たる初心の輩には、或は倦厭を來すべしと雖、少しく斯道に入らば、直ちに此れぞ時間と勞力との最も節約を得たるものなることを知らん。換言せば、此定式は即ち力の利用の最も經濟的なるものにして、スペンサーの定理に従へば、最も優美なるものなり。

とてもじっくり来ます。紙面の色味も均一なママですし、どこが強調箇所なのかも一目で分かります。

続いて「黒丸 “●”」と「白丸 “○”」を振ってみましょう：

黒丸・白丸 ■ 黒丸

茲に一事あり、之を爲すに、必ずや最良の方法なるものなくんばならず、而して、其の最良の方法は、最も經濟に合して、又た最も優美なるものならざるべからず。スペンサー氏は優美の定義を下して、動作の最も經濟的なる方法と云ふ。茶道の法とは茶碗、茶匙、帛紗等を用ふるの定式なり。其法たる初心の輩には、或は倦厭を來すべしと雖、少しく斯道に入らば、直ちに此れぞ時間と勞力との最も節約を得たるものなることを知らん。換言せば、此定式は即ち力の利用の最も經濟的なるものにして、スペンサーの定理に従へば、最も優美なるものなり。

■ 白丸

茲に一事あり、之を爲すに、必ずや最良の方法なるものなくんばならず、而して、其の最良の方法は、最も經濟に合して、又た最も優美なるものならざるべからず。スペンサー氏は優美の定義を下して、動作の最も經濟的なる方法と云ふ。茶道の法とは茶碗、茶匙、帛紗等を用ふるの定式なり。其法たる初心の輩には、或は倦厭を來すべしと雖、少しく斯道に入らば、直ちに此れぞ時間と勞力との最も節約を得たるものなることを知らん。換言せば、此定式は即ち力の利用の最も經濟的なるものにして、スペンサーの定理に従へば、最も優美なるものなり。

これまた、無問題です（ちなみに、例文として使っている櫻井訳『武士道』（もちろん縦組みです）では、ザッと見たところ、強調箇所には、黒ゴマ、黒丸、白丸の3種類が使われており、どれも肩ツキで振られています）。

ついでに「二重丸 “◎”」や「蛇の目 “◉”」も試してみます：

二重丸・蛇の目 ■ 二重丸

茲に一事あり、之を爲すに、必ずや最良の方法なるものなくんばならず、而して、其の最良の方法は、最も經濟に合して、又た最も優美なるものならざるべからず。スペンサー氏は優美の定義を下して、動作の最も經濟的なる方法と云ふ。茶道の法とは茶碗、茶匙、帛紗等を用ふるの定式なり。其法たる初心の輩には、或は倦厭を來すべしと雖、少しく斯道に入らば、直ちに此れぞ時間と勞力との最も節約を得たるものなることを知らん。換言せば、此定式は即ち力の利用の最も經濟的なるものにして、スペンサーの定理に従へば、最も優美なるものなり。

■ 蛇の目

茲に一事あり、之を爲すに、必ずや最良の方法なるものなくんばならず、而して、其の最良の方法は、最も經濟に合して、又た最も優美なるものならざるべからず。スペンサー氏は優美の定義を下して、動作の最も經濟的なる方法と云ふ。茶道の法とは茶碗、茶匙、帛紗等を用ふるの定式なり。其法たる初心の輩には、或は倦厭を來すべしと雖、少しく斯道に入らば、直ちに此れぞ時間と勞力との最も節約を得たるものなることを知らん。換言せば、此定式は即ち力の利用の最も經濟的なるものにして、スペンサーの定理に従へば、最も優美なるものなり。

このサンプルでは文字サイズが小さすぎて見づらいですね。二重丸や蛇の目は、もっと文字サイズを大きくして、且つタテ組みで行間が広い場合に使うほうが効果的かなと思います。

なお、傍点・圏点として使われる印物としては、他に「黒三角 “▲”」とか「白三角 “△”」もあるのですが、ここでは割愛します。

欧文に特有の方法 最後に、欧文特有の強調法について見てみましょう。欧文にしか使えない方法として考えられるのは、スモールキャピタルにするとかレタースペースを空けるくらいでしょうか（和文でも字間を空けることは可能ですが、強調のために字間を空けるような例は通常の和文の文章ではあまり見掛けないと思います）。

強調箇所をスモールキャピタルにしてみます：

SMALL CAPITAL ■ スモールキャピタル

If there is anything to do, there is certainly a BEST WAY to do it, and the BEST WAY is both the most ECONOMICAL and the most GRACEFUL. Mr. Spencer defines GRACE as the most ECONOMICAL manner of motion. The tea ceremony presents certain definite WAYS of manipulating a bowl, a spoon, a napkin, etc. To a novice it looks tedious. But one soon discovers that the WAY prescribed is, after all, the most saving of TIME and LABOR; in other words, the most ECONOMICAL use of force, – hence, according to Spencer’s dictum, the most GRACEFUL.

セリフ+サンセリフの場合同様、上品な感じで、個人的にはきらいじゃないです。

Frakturの場合 そして、レタースペースを空ける（ゲシュペルトする）というのは、ドイツ語でフォントがFrakturの場合によく使われるやり方です（例文は『武士道』のドイツ語訳から）：

ゲシュペルト ■ Fraktur mit Sperrschrift

Das Rittertum ist eine Blüte des Erdenreichs Japans, dort nicht weniger heimisch wie sein Wappenbild, die Kirschblüte. Es ist gleichfalls kein ausgedörrtes Musterstück antiker Tugenden in einer Sammlung getrockneter Pflanzen aus unserer Geschichte. Es ist noch immer ein lebendes Objekt mit Macht und Schönheit unter uns – und auch wenn es keine greifbare Gestalt und Ordnung angenommen hat, verspricht es seinen Wohlgeruch in der moralischen Atmosphäre und läßt uns seines fortwährenden Zaubers gewahr werden.

※ 明朝体にゴシック体太字を混ぜると似た方法で、Frakturの場合には、強調箇所に Schwabacher を使う場合もあります：

オマケ ■ Fraktur + Schwabacher

Das Rittertum ist eine Blüte des Erdenreichs Japans, dort nicht weniger heimisch wie sein Wappenbild, die Kirschblüte. Es ist gleichfalls kein ausgedörrtes Musterstück antiker Tugenden in einer Sammlung getrockneter Pflanzen aus unserer Geschichte. Es ist noch immer ein lebendes Objekt mit Macht und Schönheit unter uns – und auch wenn es keine greifbare Gestalt und Ordnung angenommen hat, verspricht es seinen Wohlgeruch in der moralischen Atmosphäre und läßt uns seines fortwährenden Zaubers gewahr werden.

Frakturにはイタリックもボールドもないのでレタースペースを空けたり Schwabacher を混ぜたりするわけですが、これらの方法はFraktur以外のフォントではあまり使われませんよね。それに結局、ゲシュペルトするとその部分が白っぽくなってしまいますし、Schwabacherにするとそこが黒くなってしまい、紙面の濃淡の均一性は失われてしまいます。

まとめに代えて 本文書では、和欧文の語句の強調法について、デフォルトの場合、和欧文両方に適用出来る方法、和文特有の方法、欧文特有の方法に分けて眺めてみましたが、少し別の観点からの感想など。

強調を実現するに際してフォントの変更を必要とするか否かという点に着目しますと、イタリック、スラント、ボールド、スモールキャピタルの場合には、フォントのバリエーションが必要となりますが、下線や傍点・圏点、ゲシュペルト（隔字体）の場合には、フォント自体は変更せずに、マクロ等で対応することが可能です。

欧文フォントの場合には、元々利用可能なバリエーションが豊富なので、フォントを変更するという方法で強調への対応が可能であるのに対して、和文で明朝体とゴシック体の2書体構成の場合には、ウェイトやシェイプのバリエーションがありませんので、ファミリをゴシックにしたり、下線に頼ったりするのも仕方ない面があるのかなという気がします（また、和文で複数のウェイトやシェイプが使える場合であっても、強調語句を明朝体太字にしたり明朝体斜体にするのが読みやすいかどうかというのは、別問題でしたし）。

強調箇所が確実に識別出来て、それでいて紙面の色味が変わらないというのが理想なわけですが、あとは、手元で利用可能なフォントのバリエーションやパッケージに応じて、強調方法を選択することになるでしょう。

